
布団が吹っ飛んだ

空気 田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

布団が吹っ飛んだ

【Nコード】

N63350

【作者名】

空気 田

【あらすじ】

布団が吹っ飛んだ。

駄洒落が織り成す、なんてことの無い日常。

布団が吹っ飛んだ〜綿毛 竜火の場合

綿毛 竜火（15）

高校1年生。せとなとは幼なじみ。

ほんのり茶色髪の毛に、中性的な顔立ち。同学年の女子にモテているが、本人に自覚無し。

羽毛 せとな（15）

高校1年生竜火とは幼なじみ。

天真爛漫で勝ち気な女子。

黒髪のショートカットで、前髪はヘアピンで止めている。

竜火がモテているのが、あまり気に喰わない。

掛敷 タツオ（40）

物干し竿を売る壮年男性。

過去にリストラの経験有り。

竿を販売中に、竜火とせとなに呼び止められる

綿毛 竜火の場合

布団が吹っ飛んだ。

同音の言葉、似た音の言葉を掛ける、所謂「駄洒落」である。「布団が吹っ飛んだ」は、その中でも代表的な作品の一つで、老若男女問わず広く親しまれている。

15年間生きてきた中で、「布団が吹っ飛んだ」を一体何回聞き、そして見かけただろうか？1000回？それよりも少ない気もするし、多い気もする。

「布団が吹っ飛んだ」には親しみに近い感情を抱いているが、しかし駄洒落という存在にあまり好意的ではない。僕が今まで駄洒落を聞き、目の当たりにしてきた状況が決して良いとは言えなかった

からだ。

通っていた小学校の校長先生が、朝礼で発した「馬は美味い」。
季節は夏だったが、「雪が見えた」と後に担任は語っていた。

とあるＴＶＣＭでは、「精がつくね」と酔っぱらいが箸で掴んだつくねを、意気揚々と仲間達の眼前に晒していた。「つくねで精が着く筈が無い！」と、親父は憤慨していた。

中学校を卒業する年の夏、祖父が家に遊びに来た時に、食卓に出されたマグロの切り身を見て、「となりのマグロだな！」と鬼の首を掴んだかの様に、僕に言ってきたのだ。祖父に言われるまで、そんな事を考えた事が無かったので、しばらくは部屋に置いてあったぬいぐるみがマグロの切り身に見えた。程なくして、ぬいぐるみは妹の手に渡る。

僕がつい駄洒落を言ってしまい、真向かいに住んでいる幼馴染みに叱責された事がある。場に興を添えるのに失敗した、という理由でだ。幼馴染みにはもう少しだけ、寛容になってもらいたいと、常日頃思う。

例を上げればキリが無い位、僕は駄洒落にあまり良い思い出が無い。幼馴染は僕より良い思い出が無い様で、駄洒落を言う人間には情け容赦無く厳しい。主に僕に対してだけだ…。

とにかく、駄洒落というのは、本来ウィットに富だ非常に高尚なものではないのかと、そう思うのだ。似た言葉、音を偶然発見したからといって、それをいちいち産物として発し、嬉々として他人にぶつけてはならない。

と、文化祭翌日、代休として学校が休みである月曜日に、何故駄洒落の事を考えているかというと、「布団が吹っ飛んだ」からである。

文化祭の疲れが思ったよりも無く、幼馴染みの目覚まし無くとも、ほぼいつも通りの７時３０分に目が覚めた。起きるのが遅いと、毎朝叱る幼馴染みに今日の目覚めの良さを見せてやりたい。そんな事を考えながら、１階へと下りた。

リビングで朝食のハムトーストを食べ、暖かいお茶を啜り、幸せな溜息を吐いていたら、「今日出掛けるから、家事よろしくね」と藪から棒に、お袋から依頼された。これといって予定も無かったので、晩飯にピザを取る確約を得た事で、依頼を引き受けた。我ながら子供じみた要求だと思ったが、僕はまだ子供でピザが好きなのだ。

そんな訳で、午前中かけて一通りの家事を済ませ、昼食に作った豚キムチを食べ、自室で読書に勤しもうとベッドの上に寝そべった。20ページ程読んだ所で、僕は自分の布団を干していない事と、携帯電話の電池が切れたままだった事に気が付いた。読んでいた本に菜を挟み、枕元に置いてあった携帯電話を充電器に差した後、掛け布団と敷き布団を両手に抱え、親父とお袋の開け掛かっていた寝室の扉を、行儀悪くもなんとか足で開けた。窓は開けていたので、そのままベランダに出た。布団を少し引きずってしまいが、先程掃除をしたばかりなので、大丈夫。3秒ルールに似た感覚を抱きながら、僕は掛け布団、敷き布団を物干し竿に掛けた。きちんと半分に折って掛けなかったので、七対三の割り合といったところ。

「ふう」

取り合えず一息をついてから、きちんと布団を掛け直そうと考えた瞬間に、風が吹いた。

頬を撫でる風に煽られて、僕は顔を上に向けた。空には雲一つ無く、水色に澄み切った空がただただ広がるばかりで、気持ち良いと感じる意外に、一体何を考えればいいのだろう………むう、いけない。今日の前を通った若奥様のスカートが捲れ、水色に澄み切った空が見えた。

などとしつかりと他の事を考えていた僕は、それでも半ば惚けていた。

少しの間を置いて、風が止んだと思ったら、今度は少し強い風が吹いた。

すると、目の前に干してあった掛け布団と、敷き布団がフワリと飛

んだのだ。

「綿毛竜火さん。私達布団が貴方の元へ来たの何時の事だったでしょう？忘れもしない、貴方が小学校6年生の時です。最初はかいた文句を言っていました、今では私たち布団にピッタリの背丈まで成長し、私達布団は毎日感慨深く、貴方を掛け、そして敷いています」

その時僕は、布団達の声と、走馬灯を見た気がした。

「ふ、布団……！」

柄にもなく、僕は叫んだ。

振り返れば、ただ風に吹かれた布団の重みやら、物干し竿の老朽化等様々な要因が重なっただけの事かもしれないが、その時はただただ驚いた。友人のSに電話しようかと思ったが、「はあ？」と怪訝やら胡乱やら色々思われる事間違いないので既にのところでとにかく、吹っ飛んだ布団の行方を確認する為に、ベランダから身を乗りだした。

「布団は?!」

一人声を出す程に、驚いていた。

布団は直ぐに見つかった。庭に落ちていた。親父が大事にしている盆栽にも、お袋が大事にしている植木鉢にもぶつかっておらず、胸をなで下ろした。布団がぶつかりそれらを駄目にしようものなら、ピザどころではない。

「布団が吹っ飛んだだよ！」

などと釈明しようものなら、ピザを取らされて国外追放されるに違いない。親父ならやりかねない。

ともあれ、ピザではなくピザを取る危機は回避されたので、僕はベランダに座り込んだ。そして、布団を掛けていた物干し台を見た。「物干し竿が折れたのか…」

そう呟いて、冒頭の通り駄洒落について一通り考えた後、現在に至る。

「吹っ飛んだ原因はおまえのせいね…」

折れた物干し竿に触れながら、僕は呟いた。

「たけやゝさおだけゝ」

その時、お誂え向きなお馴染みのメロディが聞こえてきたので、僕は自室に置いてあった財布を手にし、階段を降りた。物干し竿代は後でお袋に請求しよう、と心の中で呟いて、サンダルを履き玄関の扉を開けた。

「すみません！」

布団が吹っ飛んだゝ綿毛 竜火の場合ゝ（後書き）

ここまで読んで頂き有り難う御座います。

全3話になります。もしよかったら、最後までお付き合い下さい。

布団が吹っ飛んだ〜羽毛　せとなの場合

羽毛　せとなの場合

布団が吹っ飛んだ。

私が忌み嫌う駄洒落の一つで、未来永劫決して自分の口からは発せられない言葉でもあった。

駄洒落は、「下手なしゃれ」、「くだらないしゃれ」という意味で、気の利いた台詞だったり、同じ様な言葉を掛けたりして、その場に興を添える素敵な言葉は洒落というのだ。

とは言うものの、実際に洒落た言葉で興を添えている人を、私はお目に掛かった事が無い。空を飛ぶ豚さんと、大泥棒を追いかける警部さんが、随分洒落た事を言っているのを、TVで見た事はあるけど。

しかし、それは絵空事で、私の家族、友人、そして少し間の抜けた幼馴染みは少し意味を履き違えているようで、些か辟易としている。

くだらない洒落を、面白いと勘違いして平気で人に向かって言うものだから、

「何で私が気を使わなければいけないのよ?!」

と心中穏やかではいらぬ時でも、場合によってはこちらが気を使わないといけない時があり、ストレスが溜まってしまふ。そんな時は、真向かいに住んでいる幼馴染みで発散するから、別にいいのだけど…。

と、文化祭翌日、代休として学校が休みである月曜日に、花も恥じらう乙女である高校1年生の私が、何故駄洒落の事を考えているかというと、「布団が吹っ飛んだ」からだ。

昨日、文化祭も無事に終わり、打ち上げから帰ったきた私は、珍しく目覚ましを掛けずに布団に潜り込んだ。「泥の様に睡眠を貪るのだ」、と枕に顔を埋め、気が付くと朝の7時だった。

驚く程に体の疲れは取れていて、頭もスッキリしていたけど、それに抗うかの様にもう一度布団に潜り込んだ。しかし、体が「全く眠くありません！もう起きて下さ〜い！」と仕切りに訴え掛けるので、私は仕方なく起きる事にした。

部屋を出て、階段を降りて居間に行くと、いつもと変わらない朝の光景だった。

パパは新聞紙を読んでいて、女の子なのに眉目秀麗と言われている、美形な中学生の妹が眠そうに目を擦り、そんな二人を背中に携えて、ママは台所で朝食の準備をしていた。

「おはよ〜」

私が声を掛けると、皆一斉「おはよう」と返してくれた。

出されたトーストに、半熟の目玉焼きをのせ口に含み、某天空の城を思い出し租借していると、「今日は出掛けるから、洗濯と掃除よろしくね」とママからの依頼が。

「え〜」

頭隠して不満隠さず。つまりは嫌だったので、拒否した。文化祭翌日位ゆつくりしたいじゃない。

「竜火に頼んだら？お姉ちゃん」

「というか、そのつもりなんだろう？」

「最近、なんだか仲いいものね」

「べ別に……普通だよ……」

妹はニヤニヤしながらからかい半分な口調で聞いてきた、ところをすかさずパパがトスを上げ、ママが私に向かってスパイクを打つ。全く、幼馴染なんだし……、仲が良かった別におかしくないじゃない。もう。

そんなからかいを経て、私は渋々家事と掃除を承った。妹の言う通り、アイツにやらさせればいいんだから。

皆が家を出た後、私は早速アイツを呼び出す為携帯電話を手に取り、電話を掛けた。

1回、2回、3回と呼び出し音が鳴る。まだアイツは電話に出な

い。遅い。

5回目辺りで、ガチャと音がしたので、

「遅——い！何してんの？！」

と開口一番、大きな声で叫んだが、

「電波の入らない場所におられるか電源が入っておりません」

私が一番望まない音声が届いてきた。

「なによ……」

まだ寝てるのかしら？

私は電話を切り、真向かいにあるアイツの家に行く事にした。

玄関を開ければ、直ぐ目の前はアイツの家。大股で歩けばほんの3、4歩で着く。

家の前に立った私は呼び鈴を押そうとしたが、中から掃除機を掛ける音が聞こえる。おば様が掃除しているのだらう。という事は、アイツはまだ寝ているか、どこか出掛けたか？

確認する為に、呼び鈴を押した。掃除中のおば様には申し訳無いけど、アイツを借りたいのだ。

ところが、呼び鈴を押しても、一向に玄関が開く気配が無い。さすがに掃除に集中しているおば様の邪魔は出来ないのです、私は仕方が無く家に戻る事にした。

居間のソファーに座り、もう一度アイツに電話を掛ける。

「電波の入らない場所に……」

最後まで聞く事なく、私は電話を切った。

「む……ってもうこんな時間」

頬を膨らまし唸ってみたものの、時間は過ぎる。現在9時丁度。いい加減家事を始めないと、貴重な平日休みが潰れてしまう。さっさと終わらせてしまおう。別に家事が苦手なわけではないから。

そんな訳で、私は午前中を使って掃除と洗濯を終わらせて、自室のベットに寝転んだ。

窓から入ってくる風が、頬を優しく撫でてくれるので、
「うん。まあこんな休日もありか」

と気分良く思わせてくれる。

けど、アイツがいれば……。

と考えたところで、私は自分の布団を干していない事に気がついた。

布団から起き上がり、着信かメールが来ていないかを確認した後に、私は掛け布団を持って物干し場に出た。アイツの家とは丁度反対側にあるので、姿を確認する事は出来ない。

私は物干し竿に掛かっている、家族の掛け布団を上手にずらし、自分の布団を掛けた。その瞬間に、少し強い風が吹いた。

「きゃっ」

私は思わず顔を伏せ、普段滅多に掃かないスカートを抑えた。

風が弱まったので、顔を上げると、先程干した布団が飛んだのだ。そう布団が吹っ飛んだのだ。

振り返れば、ただ物干し竿が折れて、そんな風に見えただけなんだけど……。

「ふ、布団が吹っ飛んだ?!」

とにかく、その時の私は声に出して叫んでしまった。一瞬馬鹿らしさを感じたけど、落ちた布団の行方を確認するのが先決だった。

私は物干し場から身を乗り出して、下の庭を見た。落ちた布団は幸いにも私のだけだったが、かなり汚れてしまった筈だ。

こんな事が家族に知られてしまったら、一体どんな反応をされて、どんな詮索をされるのやら。私の脳裏に一瞬だけ下世話な想像が過ぎる。

一人顔を赤くしていると、

「たっけやっさおだけっ」

お馴染みのメロディがタイミングよく聞こえてきた。

私は取り合えず折れた物干し竿を新しいのに換えて、布団も綺麗に洗濯し乾燥機にかけて、つつがな無く家事が終わった事をアピールしなければいけないのだ。任務に失敗は許されない。物干し竿1本位の出費は仕方が無い事だ。

私は自分の部屋に戻り財布を取り、階段を降り、サンダルを履いて玄関を開けた。
「すいません！」

布団が吹っ飛んだ〜掛敷 タツオの場合

掛敷 タツオの場合

布団が吹っ飛んだ。

この業界に足を踏み入れてから、約半年。一体何度この言葉を耳にした事だろうか？私は白い軽トラックを停め、棚引く雲を眺めながら、少し前の事を考えていた。

「風が吹けば桶屋が儲かるなんてまどろっこしいったらありやあしねえ。布団が吹っ飛べばうちは儲かるのよ！」

と三代続いて葛飾に生まれた、生粋の江戸っ子である私の上司の言葉を思い出していた。

「布団が吹っ飛んでも、竿が折れなければ儲からないのでは無いでしょうか？」

「こまけーことは気にすんな新入り！」

私の肩を思い切り叩きながら、呵々大笑した上司の笑顔が印象的だった。なるほど、江戸っ子とはこういうものかと、その時私はえらく納得した。

かく言う私も、分類上は江戸っ子に属するのだが、生まれは埼玉に程近い練馬のある町。お世辞にも下町気質があるとは言えず、曾祖父から私の代までつつが無く暮らしてきた。

義務教育、高校生活、大学生活を平々凡々と送り、一般企業に就職し、それなりに実績を上げ、それなりの役職にいついた。が、しかし、突如として勤めていた会社が倒産し、退職金を貰えずに無職となったのが、約1年前。それなりに働かないで暮らす事が出来る、それなりの貯蓄はあったが、所詮はそれなりなので、当然再就職の道に足を向けるのであったが、どうしたものか、間も無く45歳を迎える私を受け入れる企業は皆無であった。不幸にも私が勤めていた会社で得たのスキルというものは、焼け石に水程度のものであった。井の中の蛙大海を知らず。途方に暮れながらも、肉体関係

の仕事であれば、どうにか受け入れてくれる会社を幾つか見付ける事が出来たが、お世辞にも体力があるとはいえない私には、その気概が無かった。いやはや、わがまを言ったものである。

結局仕事が見つからず、貯蓄を崩し生活していたのだが、僅か半年で尽きた。私が築いたそれなりとは、所詮そんなものだったのかと、事実を突きつけられた私は随分と落ち込んだものだった。

そして、相談する友人と家族がいないという事実も、私の心に重く押し掛かってきた。

父と母は、私が幼少の頃に亡くなっていて、父方の祖父母が私が生まれる前に亡くなっていた。私は母方の祖父母に育てられたのだが、大学を卒業する直前に、祖父母共に病に倒れ、そのまま還らぬ人となった。

野暮な話だが、保険金はそれなりの金額が下りたのだが、祖父母にはそれなりの額の借金があったのだ。知らぬが仏とはまさにこの事であった。

考えてみれば、葬儀の時に親及び友人が誰一人来なかったのも納得がいく。

結局、それなりの保険金はそれなりの借金に当てられて、色々と綺麗に無くなった。

元々友人が少ない私は、大学を卒業就職したと同時に、生まれ故郷を何の躊躇いもなく離れ、会社が近い神保町へと移り住んだのだ。当然、少ない友人とも疎遠になり、連絡を全く取らなくなった。

随分と孤独だったのだなと、無職の半年間に、私は痛感したが、不思議とすんなりと受け入れられたが、確実に路頭へと迷い込んでいた。

蓄えが少なくなった私は、あまり飲めない酒に逃げるという方法を取ったのだが、逃げた1日目にあっさりと捕まってしまった。

生まれて初めて入る立ち飲み屋で、生まれて初めてホッピーを注

文した私は、その味の素朴さに驚いていた。モツ煮込みをつまみに飲んでいたのだが、空腹に流れ込んだホッピーの酔いの威力は私にとっては凄まじく、気が付けば随分と気持ちの良い状態であった。

気がでかくなつたのだろうか。私は隣に立っていた、恰幅のいい肌が少し浅黒い、恐らく同年代の男性に声を掛けた。居酒屋で知らない人に声を掛けるといふ行為、当然その時が初めてであつたが、「山、好きなんですか？」

その男性が、私の唯一の趣味登山が好きであると、確固自信があつた。

「おつ。なんで分かつた？」

浅黒い肌に、少し赤みがかかり、昔見た映画に出てくる酷く酔っぱらつたアメリカ人を彷彿とさせる、屈託の無い笑顔を浮かべ、その人は返してきた。

それから半年後、私は軽トラックに乗り、物干し竿を売る毎日を通_と過_とごしているのである。わざわざその経緯まで思い出す事は無い。実に瑣末な幸福である。

私はいつもの様に、軽トラックに物干し竿を三十本載せて、小さい事務所から町へと繰り出した。社長曰く、売れば何処へ行つても構わない、というがガソリン代を考えると。無駄には遠出は出来ないが、販路を把握出来ないので、博打要素が強い営業であつた。

しかし、その日はどうにも様子がおかしかった。八時過ぎに車を出し、9時前に武蔵野市のある住宅街に到着した私は、スピーカーの電源を入れ、カセットデッキの再生ボタンを押して、ゆっくりとした速度で車を走らせていた。

「たけやゝさおだけゝ」

この半年で随分と馴染み深くなつた、この歌を何百回聞いて声が掛ければ良い方であつた。

その為、1日の売り上げは雀が涙を流す事が常であつたが、「ちよつといいかしら」

冒頭の歌の部分を流しただけで、一人の主婦から声を掛けられの

を皮切りに、物干し竿は驚く程の早さで捌けていった。

少し早い昼の休憩を取る時には、何と物干し竿は残り一本となっていた。

「珍しい事があるもんだ」

食後の煙草を車内で呑みながら、一人呟いた。

サイドミラーに、少し満足気な自分の表情が写り、私は気恥ずかしさを感じ、時計に目を反らした。

時刻は正午を少し過ぎた辺り。私は再びゆっくりとした速度で車を走らせた。

雲一つ無く、空は水色掛かった色をしている。運転席から入ってきた風は、助手席から抜けて、私の頬を撫でる。とても気持ちが良い。山に登っている時意外で、こうして空や風に慈しみを感じるのは、随分久し振りかもしれない。

スピーカーから流れるいつものメロディとは別に、私は鼻歌を奏でていた。幼少の頃、祖母が台所で歌っていた。何の曲かは、全く思いだせない。しかし、思い出す必要は無い。今、私は非常に気持ちが良い。

「すみません！」

私が半ば悦に浸っていると、突然声が聞こえた。左耳、右耳から同時に、そうステレオで聞こえてきた。

私はブレーキ掛けて車を止めて、右、左と顔を窓の外を見た。お客様からの呼び声が聞こえる様に、当然運転席の窓も、助手席の窓も開けてある。これから季節は辛いかもしれない。

と、一瞬だけ私は冬の寒さに思いを馳せ、呼び止めたお客様の顔を確認した。

運転席側の窓から声を掛けてきたのは、15歳位だろうか？一瞬少女と紛う程の端正な顔立ちをしていたが、「すみません」、ともう一度呼び掛けてきた声で、少年だと認識する事が出来た。

続いて、助手席側の窓から声を掛けてきたのは、こちらも15才位だろうか？運転席側から声を掛けてきた少年と同様、端正な顔立

ちをしいてた。「すいません」、と呼ぶ声からして、紛う事無き少女であつた。

少年には少し大人しめの印象おを受けたが、少女の方からは非常に快活とした印象を受けた。

「物干し竿下さい！」

「ちよつと」

「何だよ」

「あんたこそ何よ」

「何って…別にお前に関係ないだろ」

「はあ?!」

「……」

さてどうしたものか。少年と少女は突然窓越しに言い争いを始めたのだ。「なんで今日電話に出なかつたのよ!」「電池が切れてたんだよ!」、と車内を隔てて飛び交う話しの内容から、少年と少女は知り合い、いやそれ以上の関係だと、推察できた。

「いやあ…二人共仲が良いねえ。付き合ってるのかい?」

「付き合つてません!!」

見事に息が合つた答えが返つてきたと思つたら、二人はまた言い争いを始めた。お客様の機嫌を損ねてしまつたようだ。未熟なり。

「昨日だつて一緒に回ろつて約束したのに、すっぱかした上に転校生と仲良くクレープ食べてるし……信じられない!バカ!」

「だから!何回も謝ってるだろ!……それにお前だつて、アイツと随分と楽しそうにしてたじゃないか!」

「ゴホンツ……あーお二人さん。物干し竿が欲しいんだよね?」

痴話喧嘩から私情の纏れ。男女というのは、何時の時代も変わらないもの。など感慨に浸っている場合ではなく、話しが拗れ物干し竿とは別の話題に飛躍しそうだったので、私は二人を嗜めるつもりで声を掛けた。と同時に、車のクラクションが後ろから聞こえた。住宅街とはいえ、車が往来する真ん中で何時までも車を停めているわけにはいかないので、私は少年と少女に声を掛けてから、車を道

の端に停めた。後ろから来ていた車は、走り去っていた。

「お嬢ちゃん達物干し竿が欲しいんだよね？」

私は車から降りて、荷台の後方で睨み合っている少年と少女に改めて声を掛けると、二人は無言で頷いた。

「何時も余る程に載せているんだけど、見ての通り今日はどういう訳か1本しか残ってなくてねえ……」

「私が買います」

「僕が買います」

「……………」

さて、困ったものだ。少年と少女は互いに譲る気は全く無いようだ。しかし、このご時世に、若人達が物干し竿を欲しがるであろうか？統計的に、今まで声を掛けてきたお客様のほとんどが主婦の方達で、それ以外は老人であった。

「お嬢ちゃん達。何故物干し竿が欲しいんだい？」

自分でも馬鹿な質問だと思った。欲しいと言ってくれるお客様に、何故欲しいのかと聞く物干し竿売りがどこにいる？代金を貰って商品を渡せばいいだけの話であったが、需要に対して供給が間に合っていない今、少年と少女が物干し竿を欲する理由を聞き、私なりに判断して、どちらかに提供しようと思った。いやはや、誠に僭越ではあるが。

「……………」

予想外の反応であった。二人は顔を赤くして、俯いてしまった。

何か特別な理由でもあるのだろうか？物干し竿が何かしらの原因で折れる以外の理由が、私には全く想像出来なかった。

「……飛ん………」

「布団……………だ」

少年と少女が同時に、何かを呟いたので、

「ん？」

私が聞き返すと、一生忘れないであろう、返答が返ってきたのだ。

「「布団が吹っ飛んだ！」」

二人は顔を真っ赤にして叫んだのだ。

「ぶっ……」

「「おじさん！」」

青天の霹靂。

私が噴出すと、少年と少女は諷める様に声を上げた。

しかし、笑いを止める事が出来なかった。布団が吹っ飛んだという、荒唐無稽かつ素朴な理由と、少年少女が声を揃えておじさんと呼ぶ様に、私は青空の下、生まれて初めて豪傑笑いを響かせた。

苦しくて息が出来なくなる程に、私はしばらく笑ったが、今が商売中である事を思い出し、どうにか息を整えて顔を上げた。

少年と少女は相も変わらず顔を真っ赤にしていた。怨ずられては敵わないので、私はある提案をした。恐らくこれが、最善の策である。

「お嬢ちゃん達。おじさん今から会社戻って、もう1本竿持つてくるから」

「え？でも……」

「いいからいいから。でも、今積んでる物干し竿は、先ずはお嬢ちゃんに売る。いいね？」

私は少年の言葉を遮って、積んでる物干し竿を荷台から外して、二人の目の前に差し出した。

「レディーファーストってやつだ」

私はこんな物言いをする人間だったかしらん？と自分自身に驚きを感じつつ、物干し竿を少年に手渡して、

「ほら、手伝ってやんな」

肩を軽く叩いた。

「は、はい……」

「おじさん！ありがとう！」

「いや、大丈夫だよ」

少女の朗々とした声が、非常に心地良かった。

「それじゃ、また後で来るよ」

私はそれだけ言い残して、車に乗ろうとしたが、一つ聞き忘れていた事があった。

「お嬢ちゃん達の家はどこだい？」

「ここ」

少女は目の前に家を、少年は真向かいの家を指さした。

「わかった。ありがとう」

私の胸を、何か満ち足りた暖かな気持ち広がった。

荷台に何も載っていない軽トラックに乗り込んだ私は、一度バックミラーを確認した。少年と少女は手を振っていた。それに応える様に右手を軽く上げ、車を出した。

「布団が吹っ飛んだ……か」

私は青空を眺め、一度だけ呟いた。

布団が吹っ飛んだアフター

少年と少女の家を離れてから1時間後、私は事務所に戻り事の経緯を社長に話した。

「何でい。狐にでも化かされたか？」

そう言って豪傑に笑う社長を見て、私も笑ってしまった。

一頻り笑った後、私は車に乗り込んだ。

青空の下、荷台に一本だけ物干し竿を載せ、無音で走る白い軽トラックは、微笑を浮べる私を載せて、少年と少女の元へと向かった。

「布団が吹っ飛んだ」

駄洒落も、悪くはない。

終わり

布団が吹っ飛んだ〜掛敷 タツオの場合〜（後書き）

以上で完結になります。ここまで読んで頂いて、有り難う御座います。

ご意見、ご感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6335o/>

布団が吹っ飛んだ

2010年10月31日23時25分発行